# フレンドロープ

空太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
フレンドロープ

【Ｎコード】
Ｎ９５４４Ｐ

【作者名】
空太

【あらすじ】
空から女神のレンディが舞い降りて、僕に「フレンドロープ」というものをくれた。どうやらフレンドロープとは、誰とでも友情を結んでくれる、便利なものらしいが……。
友情と、自分の存在に、希望を与える物語。

「おめでとうございます！あなたは孤独を一生味合う事の無い、素晴らしい世界を手に入れました！」
頭を突き刺す様な声を注意深く聞き取ると、無数の白い羽根を胴体に纏いながら、ふわりふわりと上下に飛んでいる少女はこう言っていた。
僕は、半ば無重力状態の頭を何とか首に装着し、少女の言葉を頭の中で一転二転させてみた。
しかし、理解出来るはずが無かった。言っている「言葉」は通じたのだが、言っている「意味」までは分かる訳が無いだろう。更に付け足すならば、少女の存在も意味不明で理解不能。
すっかり取り残されている僕の前へ、少女は音も立てずに落ちてきた。
「初めまして。私は友情の女神〝レンディ〟です。あなたが今後一生孤独を感じないよう、あなたの元に現れました。」
「え……友情の女神……」
レンディは戸惑う僕には目もくれず、彼女の背中に生えている一際大きな羽根から無数のロープを取り出し、僕の方に向けて来た。どうやら、ロープを与える女神様は、僕に質問のタイミングは与えてくれないらしい。
レンディは両手に無数のロープを抱え、微笑えむ。
「このロープはフレンドロープと言います。例えば、憧れの人と友達になりたい時、関係が険悪になった時、このロープを使ってご覧なさい。二人の間にはたちまち固い友情が結ばれるのです。」
まだ戸惑う気持ちはあるが、僕は少しずつ理解し始めた。要するに、相手がどんな人であっても、その相手と友情を結び、孤独感を無くす事。常に誰かに囲まれ、この上ない幸せな人生を送れる事。それが、このロープの効果らしい。

僕は唾を一つ飲み込んだ。これは、チャンスかもしれない。
この時僕は初めて、流暢な言葉を話す事が出来た。
「レンディさん、使い方を教えてください。ロープの。」
レンディは目を細めて微笑み、右手を高く上げ一本ロープを垂らした。
「ロープの片端はあなたが持ちます。」
そう言って、レンディはロープの片端を僕に差し出した。僕は緊張で胸が高鳴り、ロープを持とうとする手が自ずとゆっくりになっていく。ロープをいざ持つと、感触は市販のロープと変わりなかった。ロープを改めて細かく見てみると、ロープはミルクの様な、甘さが含まれた白さを帯びている。太さは書道用の大筆一本くらいといったところか。
ロープをまじまじと見つめる僕に構わず、レンディは続けた。
「もう片端は、相手が持ちます。これだけです。もう分かりましたね。」
僕は真剣なまなざしでロープを見つめ、頷いた。
レンディは目を見開き、まるで蝶の様にクルリクルリと舞い上がる。
「良い友と良いお時間を。」
レンディはそう告げ、空に吸い込まれていった。
レンディがいなくなったのを確認すると、僕はロープを一本だけポケットにしまい、残りのロープは地面に投げ捨てた。他なんていらない。一本だけあればいい。そうだ、僕とあいつは、やり直すんだ。僕はあいつがいなきゃ生きていけないんだ。
―この物語は、秋の夕日が空を染める、僕〝恵二〟の下校時から始まった。
朝の光の中で、雀が歌い踊る。僕も雀を真似るかのように、揚々とした行ってきますを家族に残して、玄関を飛び出した。こんなに

胸が踊る登校は、一体何か月ぶりだろう。
自宅から四件先の駄菓子屋を右に曲がり、そこから真っ直ぐ真っ直ぐ、大体３００メートル。〝板井歯科〟なんていう、患者がいかにも寄り付かないだろうと思ってしまう医院の前に、〝あいつ〟はいた。
だが、嬉しいはずなのに、足が重くなる。分かってる。怖いのだ。また、あの諦めた様な、冷たい目線を浴びるのが怖いのだ。

〝あいつ〟の名前は蓮太という。僕の唯一の友達だ。
高校に入学後、同じクラスで、しかも席が前後という事もあり、二人でポツリポツリと話し始めたのがきっかけだった。
僕は人見知りが激しいゆえに、よく知らない人と会話をするのが苦手だ。
対面して話すとなると、体に緊張感が走り、口が固まってくる。
増して蓮太は、身長が高く、割りと筋肉質で長髪、顔つきは鋭いものを持っていた。僕の経験上、そのような外見のタイプとは上手くやれた試しが無い。だから、初めは蓮太の事が怖かった。蓮太と話し始めた頃も、同じような感覚が僕を襲った。
しかし、蓮太はけして僕をバカにしなかった。黙って僕の話しに耳を傾けてくれた。やがて、蓮太への緊張感は安心感へと変わり、そして今はかけがえのない友情へと変わっていった。
しかし、僕はそれ以上友情を深める事が出来ない。小学生の時も、中学生の時もそうだった。
仲良くなったかと思えば、相手がそっけなくなっていく。それに対して僕は泣きながら怒り、相手は離れていく。独りぼっちになった僕の頭に、人生の終焉が過ぎり、何もやる気が起きずに寝込んでしまう。その繰り返しだった。
そして最近の蓮太は、僕に冷たくなった。僕の話に、余り言葉を返さない。もしかしたら蓮太も……、という妄想が、僕の全身を凍り付かせる。嫌だ。そんなの絶対嫌だ。僕は制服のお尻に付いてい

るポケットをギュッと握り締めた。大丈夫だから、ロープがあるから大丈夫だから、と自分に必死に言い聞かせる。
　蓮太は僕を見つけると、僕に対して諦めた様なまなざしを向けた。そして今日もそっけなく、「おはよ、行こうぜ」と言い、学校の方角へ歩き始めた。
蓮太の背中を見ていると、僕の中で「僕は悪くない」という声が響き始めた。そうだ、蓮太が悪いんだ。きっと、他に良い友達が出来たんだ。僕との話に飽きたんだ。
　そう考えているうちに、目が熱くなっていったが、何とか堪え、そして精一杯の笑顔を作り、蓮太に声を掛けた。
「蓮太、お願いがあるんだけど。」
蓮太は後ろにいる僕の方へ振り向き、訝しげな表情を浮かべた。
「宿題なら見せねえぞ。」
「違うって。」
僕は高鳴る胸を押さえながら、ポケットからフレンドロープを取り出した。ロープの片端を右手で掴み、もう片端を左手で掴み、蓮太に向ける。
「蓮太、これを掴んで欲しいんだけど。」
僕は緊張を隠し、精一杯の笑顔を蓮太に向けた。
「……あぁ、良いけど。」
蓮太は変わらず訝しげな表情を浮かべながら、ロープのもう片端を掴んだ。

　蓮太が掴んだ途端、まるで特撮アニメの変身のシーンの様な現象が起こった。
　甘く白かったロープが、突然虹色の光を発し、光は二人の周りにあるの空気までも染めていく。その中に蓮太と僕も包まれていった。
　突然の事に言葉が上手く出て来ないが、怖くはなかった。何故だか温かさを感じた。

光が消えるまでにどれ位経っただろう。何秒だったろうか。何分だったろうか。
　唖然とした僕を見た蓮太は、途端に僕の手を握った。そして最近見せる事のなかった笑顔を顔一杯に浮かばせた。
「おはよう恵二。さあ、学校に行こうぜ。」
すると蓮太は僕の手を半ば引っ張りながら、学校へと向かって行った。しかも学校への道中は、話が弾む弾む。やった。ロープは本物だったんだ。
　僕は信じた。蓮太は僕だけのものになると。

　ロープの効き目は、学校に着いてからも変わりはなかった。休み時間になると、席替えをしたゆえに僕と離れた席から、蓮太は嬉しそうに僕の席の近くにやって来る。蓮太は僕の他にも友達がいるにもかかわらず、休み時間中は僕の側から離れようとしない。
　授業が始まると、蓮太は自分の席には戻るが、僕の方をチラチラと見ている。それはまるで、幼稚園に通い始めたばかりの園児が、園門で見送る母親に見せるような、寂しい目付きだった。きっと蓮太は、授業なんて頭に入っていないだろう。いつもの蓮太は、教師の話を一字一句逃さず聞く。蓮太曰く、親の金で学校に行かせてもらっているのだから、しっかり学んで来るのが礼儀、らしい。だから、今日の蓮太の姿は、普段では有り得ないものだった。
　しかしそれが、何故だか心地よかった。蓮太は僕の事しか見ていないのだ。

　つまらない。今日の放課後も、蓮太はサッカー部の練習で、一緒に帰る事が出来ない。
　蓮太と一緒に帰りながら、駅前のゲームセンターに寄って、蓮太に今流行のクマの縫いぐるみを、ＵＦＯキャッチャーで取って貰う。　そんな妄想を描きながら、オレンジ色の川のほとりを歩いて

いると、ベンチに白い羽根を纏った少女〝レンディ〟が座っていた。片手にはショートケーキがあり、フォークも使わず直接口を付けて食べている。女神にはあるまじき食べ方。
「あ、恵二さん。如何ですか、ロープの使い心地は。」
「それよりもレンディさん……。何でそんな食べ方をしているのですか。」
レンディはどうでもいいと言うように、僕に視線を合わせなかった。
「女神だって、ケーキにかぶりつきたい時だってありますよ。それよりも、一本使ったのでしょう。蓮太さんに。」
驚いた。女神だけあって、空から見ているんだろうか。でもこれじゃ女神じゃなくてストーカーと変わりないだろう。
「私は空から見ています。でも、ストーカーと言わないでくださいね。」
あ……心も読めるんだろうか。ならば仕方ない。正直に言おう、と決めた。
「なかなか良いです。休み時間は一緒に居れるし、授業中は僕の事を見ていてくれているし。でも本当は、放課後も一緒にいたいんです。」
先程抱いた妄想を、僕はもう一度頭に描いた。
　するとレンディ、クリームの付いた指を舐めながら、当たり前という風に言い切った。
「その望み、明日には叶いますよ。」
「えっ」
僕は始め、半信半疑であった。何故なら、蓮太のサッカーへの熱意は何者にも代え難いと、僕は知っていたから。しかし、このロープの効き目は確かな様だ。信じるか、疑うか。僕の気持ちの中では、半々のバランスはとっくに崩れていた。
「レンディさん、明日楽しみです。」
レンディは微笑み、また蝶の様にクルリクルリと舞い上がった。
「良い友と、良いお時間を。」

そう言ってレンディは空へと消えて行った。
相変わらず彼女はせっかちだ。おそらく皿とフォークの前に、ケーキに手が行ってしまったのだろう。

「恵二、一緒に帰ろうぜ。」
次の日の下校前に、蓮太に異変が起きた。レンディさんが言っていた為、きっとロープは一緒に帰れる様に仕向けてくれると予想はしていたが、現実に叶えてくれるとなると、高揚感に、驚きという感情も付け加えてくれる。
だが、僕はここで始めて不安感を覚えた。
「蓮太、練習はどうするの。」
蓮太は当たり前という様に、退部届を提出した事、チームメイトから困惑の声が上がったが軽く聞き流した事、だからこれからは毎日一緒に帰る事を、僕に話した。
僕は怖くなった。ロープの効き目は、時にその人が大切にしている何かを奪う事もあるらしい。
蓮太は顔を赤らめながら僕と手を繋ぐ。
「お前の好きな所に寄り道して行こうぜ。」そう蓮太に言われたものの、僕はそんな気になれなかった。
「ごめん、蓮太。今日はすぐに帰らなきゃ。」
レンディさんに会いに行かなきゃ。ロープの効き目を弱らせて欲しいと伝えに行かなきゃ。僕は初めて、ロープの恐ろしさに気付かされたのだ。
あれこれ考えていたから、蓮太が震えているのに気付いた時は、既に手遅れだった。
「何だよ、俺はお前と帰りたくて部活を辞めたんだぞ。わかった、俺の事が嫌いだから、一緒に帰りたくないんだろ。」と蓮太は怒鳴り始めた。さらに涙を零しそうな目を向けて来た。僕は言葉が出なかった。今の蓮太はまるで五歳児だ。いつもの蓮太だったら、ここまで感情を露にしない。

これもロープの仕業なんだろうか。
周囲の生徒は唖然として蓮太を見ている。　僕は感情むき出しの蓮太と、周囲の目に圧倒された為、否応無しに蓮太と一緒に帰る事になった。手を繋ぎながら。そして帰りにゲームセンターに寄り、今流行のクマの縫いぐるみを蓮太に取って貰った。しかし、嬉しさを噛み締める、何て事は思えず、唯々後悔と罪悪の血潮が僕の体中を駆け巡っていた。

「俺、恵二から離れた方が良いかな。」
これがゲームセンターから帰って来た夜、蓮太から掛かって来た電話の最初の一言だった。この一言がプレッシャーとして僕にのし掛かり、先程まで感じていた眠気を吹き飛ばした。
「何で……。僕は蓮太の事好きだよ。
」
電話の向こうからグスグスという音が聞こえて来る。どうやら蓮太は泣いているらしい。
蓮太は嗚咽を漏らしながら、話を続けた。
「だってさ、一緒に帰ろうって誘った時、恵二は困った顔してたし。
」
違う。あれはロープの効き目に困惑していただけだ。
「それに、俺がクマの縫いぐるみを取ってあげた時も、全然嬉しそうじゃなかったし。」
だから、あれは後悔と罪悪感で一杯で……。
蓮太は堰を切ったかの様に号泣し始めた。
「俺の事嫌いなんだろ。もうさ……俺なんか居なくなった方が良いだろ。」
この言葉を聞いた途端、過去の映像が僕の頭を流れて行った。そして、重く固まった何かが、頭の中で弾けた。
そうだったんだ、わかった。このロープの本当の役割が。そして、何故今まで本当の友情を築く事が出来なかったか。

僕は必死になって蓮太をなだめた後、レンディさんに昨日会った、川のほとりに走って行った。

僕は問う

「僕と一緒に遊ぶのが嫌なの？」

僕は怒る

「僕の事が嫌いなの？」

僕は泣く

「僕なんて居なくなれば良いんだ！」

秋風が静かに大地を滑り、僕のTシャツを膨らませ、火照った体を冷していく。上がった息を整える為の深呼吸が、どうやらレンディへの合図になったらしい。

レンディの口は微笑んでいたが、視線だけは真剣そのものだった。微笑んでいたレンディの口が開く。

「気付いたようですね。」

僕はレンディを見据え、静かに頷いた。僕は一つ深呼吸をし、口を開いた。

「今の蓮太は……僕自身だ。」

レンディは目を閉じ、また目を開いて言った。

「フレンドロープは、自分の心と、片端を掴んだ相手の心を移し替える事が出来ます。つまり、恵二さんの心は今蓮太さんの中に、蓮太さんの心は今恵二さんの中にあります。昨日からの蓮太さんの言動は、恵二さんの心の中の声ではないでしょうか。」

僕は目を閉じ、静かに頷いた。

僕はいつも怖かった。ささいな事でも、友達とすれ違うのが。僕はいつも怯えていた。友達が僕から離れていく事に。

その度に、嫌われていると思い込んで、僕なんていなくなってしまえばいいという思いに囚われていった。

しかし、友達は自分の事を大切に思ってくれているからこそ、

自分なんか消えてしまえば良い、という言葉や想いは、友達を深く傷付ける。自分は救いにならないんだという非力感に、友達は悩む事になるんだ。

結局友達と離れたら、僕は一人でいるべきなんだと塞ぎ込んだ。そして、失う怖さが溢れだし、誰かと話せなくなっていった。

「僕は…悲しい人間だった。」

気付いた事は余りにも大きく、僕の目から滴が零れていった。

レンディは僕に歩み寄り、静かに囁いた。「人は皆一人で生きているの。生まれた時から死ぬまで一緒にいる相手なんていないでしょう。」

僕は涙を零しながら、静かに頷いた。

レンディは続ける。

「大切な人との別れは確かに辛いわ。でもね、別れる事を嘆くより、大切な人がくれた、大切なものに感謝をしなさい。」

レンディは、「ね」と僕に微笑みかける。今度は、目も柔らかに。

「練習の後、熱が出た。家に誰もいないから看病に来て。」

十二月に入って最初の蓮太からのメールはこれだった。僕はやれやれと言ってはいるものの、自然と笑顔になる。

外では、ちらちらと舞う雪が、秋に出会ったレンディを思い出させた。

あのやり取りの後、すぐに蓮太ともう一度ロープを掴み合い、お互いの心を元通りにした。

蓮太はサッカー部に復帰したが、復帰の申し出をした際は顧問教師に延々と説教をされたらしい。そして、僕は蓮太に、訳の分からないロープを使った罰として、特盛り味噌チャーシューメンをおごらされた。

最近嬉しかったのは、僕に余裕が出来て付き合いやすくなった、蓮太から言われた事だ。僕自身の考え方の癖に気付けた事や、何よりレンディの最後の言葉が、僕の恐怖感を消し去った。

もう自分は消えても良いだなんて思わない。僕は僕の道があるし、相手には相手の道がある。僕と相手の道が重なった時、一緒に笑い合えれば良いって思えるんだ。

「良い友と、良いお時間を。」

空からレンディが、そう言ってくれている様な気がした。

完

## （後書き）

ＢＬではありません。

主人公恵二は、境界性パーソナリティ障害の傾向があります。その為、どうしても友達にはベタベタしてしまうのです。

しかし、フレンドロープを通してどのように自立していくのか、を描きました。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9544p/

フレンドロープ

2011年1月8日20時40分発行